
答えはありますか？

るうと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

答えはありますか？

【Zマーク】

Z4936M

【作者名】

るうと

【あらすじ】

ちっぽけな自分なんて滅びてしまえ。私、山中沙羅は御歳18歳の高校3年生の夏に飛び降り自殺した。そんな私が異世界とやらで生まれ変わつて第2の人生なんて、何という皮肉だろう。何故、私は異世界に転生したのだろうか。そして何故私を今度は男の子としたのか…答えはありますか？

0話・～プロローグ～

広い、広い空

深い、深い海

そんなのに囮まれている ちっぽけな自分なんて

～滅びてしまえ～

その瞬間、私は大きな空へと踏み出した。

私、山中沙羅（やまなかわら）は御歳18歳の高校3年生の夏に

学校の屋上から飛び降り自殺をした。

自殺の理由? そんなの分かんない。

ただ、全部を世界のせいにして逃げただけ。

弱い自分に嫌気がさしただけのこと。

そんな世界を恨んで死んだ私が、
異世界とやらで再度生まれ変わり生きているなんて、
何という皮肉なんだろうか。

1話・ソラ＝ブライアン

青い、碧い広がる空。

空はどんな世界でも共通なんだ‥。

青い世界を睨みながら思う。

「ソラ、どうしたの？」

優しいソプラノの女性の声に、私は振り返る。

ほのかに暖かい日差しを浴びた公園に、
一人の女性が立っていた。

最初に述べたように、私はどうやら異世界で新たな生命をもらつた。

国の名前は『アボルテ』。人口5千人程度。

王が国を治め、他国との戦争はいつ起きてもおかしくない世の中
らしいが

今の所は戦争もなく平和である。

「なんでもないよ。空を見ていただけ。」

そう言って私は、女性のもとに駆け寄る。

そ う な ん だ 、 と 咳 い て 私 の 頭 を な で る 女 性

ちなみに私の第2の母上、この世界で私を産んだ人である。

「ソラはいつも、何か考え方をしているのね。」

手を繋いで、家へ向かいながら母上は言つ。

「 そ う か な ？ 実 は 、 何 も 考 え て な い よ 。

私が考へてゐるのは、考へるといふよりも陳腐でこの世界には必要ない」と。

きっと考へてゐるという分類にも入らないだろ？

「いつかソラが思うことを表現できるモノと

「出でると良いね。」

母上は私の方を向いて優しく微笑む。

私もその眩しい笑みに微笑み返す。

上手く笑えていますよ、つい。

母上は気づいていたのかもしれない。

私に感じる子供らしくない態度や違和感に。

それでも、優しく接する素晴らしい人。

母上は気づいているのかもしれない。

私の中では様々な音楽が溢れていることに。

ソラ＝ブライアン。男の子。御歳5歳。

2話・ブライアン家

私が自分の中に渦巻く音楽に
気付くのに時間はかからなかつた。

空を睨んでいても、ふと頭の中にメロディが生まれる。

私はそのメロディに歌詞を付けることにした。
それが最近のマイブームである。

いつか声に出して、歌つてみたい。

ブライアン家は、母上と父上の間に3人の子供を授かつた。

1人目は私の兄である、アル＝ブライアン（8歳）
2人目はこの私、ソラ＝ブライアン（5歳）
3人目は妹の、ティア＝ブライアン（3歳）

私の両親は美しい人達である。

母上は儂い系の美女ならば、父上はストイック系の美男である。

両親はいわゆる幼馴染であり、大恋愛の末に結婚したと聞いている。

本当かどうかは、謎であるが。

現在も新婚のように仲が良く、お互にを支えあつて居る。
理想の夫婦であり、私の母だ。

両親が整つた顔だからといって、
子供も整つて居るとは限らない。

しかし、我がブライアン家は全員整つた顔つきで産まれた。

兄のアルは、父に似た整つた顔立ちで将来
沢山の女を泣かせるだろうと思つ。

妹のティアは両親からバランスよく受け取り
目がくじくじと大きく、可愛い顔立ちをしている。

そして私ソラは、母親似で良く女の子に間違えられる。
父上いわく、幼い時の母上にそっくりらしい。

「「ただいま」」

私と母上は顔をそろえて家に入った。

「おかえり」

父上の低い重低音は甘く、愛しい家族へと発せられる。

「おかえりー！」

妹のティアはストレートと私に近寄つて抱きつくる。

何故か、妹は私ことともなついた。

可愛いので問題はないが、

キレイ過ぎて触れるのを躊躇う時がある。

「ティア良い子にしてた?」

私は小さくて可愛い妹を撫でながら尋ねる。

「うんーティアねー、お絵かきしてたのー。」

私に見せたいのだらつ、ぐいぐい服を引っ張り始めた。

「あらあら」と言いながら、後ろで微笑ましそうに見守る母上。

私は慌てて靴を脱ぎ、妹の自信作を拝見しに行く。

「やつこえば、アルはどじたの？」

という母上が声のしなかつた人物を尋ねるのが背後から聞えた。

椅子に座りながら、「コーヒーもどき（似ているが色は白い物）」を飲んでいた父上が答える。

「友達と遊びに行つたよ。もつすべ帰ると思つけれど……」

「ただいまー」

噂をすれば影がさす。兄が帰つてきたようだ。

「「「おかげ」」」

私たちの家族の声が重なる。

いつも幸せな風景。

私は一枚の絵のようだ。

この風景を覚えておこうと思つたのだ。

4話・妹への子守唄

今まで沢山、曲を作ってきた。

そして、今日初めて
声に出して歌つてみた。

その日は母上も父上も兄も忙しく
私とティア以外の家族は、
全員出かけていた。

そのため、私がティアのお守りを引き受けたのだ。

ティアは中々寝付かず、私を困らせた。

窓から差し込む午後の暖かい日差しにつられて
私は窓から空を見上げる。

漠然と広がる水色の空と、漂う雲。

また新しいメロディが私の中で
固まり、弾け、また流れる。

子供を寝かしつけるのは、子守唄。

という、前世での安直な考えで
私は即興で作った歌詞を、
メロディに乗せて歌つてみた。

横たわって布団をかけている
ティアのお腹をポンポンと触れながら
リズムをとる。

きっとベースは子守唄なのだろう。

どこか温もりのある、あたたかい曲になつた。

歌い終わり、いつの間にか閉じていた

自分の瞼を開く。

見ると、ティアがスースーと
心地よさそうに眠っていた。

天使みたい。

ティアのやわらかい髪を撫でて、
私の初のリサイタルは幕を閉じた。

私の歌の最初のファンは、妹のティアだった。

あの子守唄がとても気に入つたらしく、
起きた後に何度もアンコールを受けた。

はつきり言って、子守唄の歌詞やメロディは
曖昧にしか私は覚えていない。

そのことを説明して、アンコールを断つても
妹はぐずる一方である。

そのうち帰宅して私と妹のやり取りを見ながら
リビングでくつろいでいた両親や兄が、
私の歌に興味を持ち始めた。

「ソラの頭の中には沢山のメロディが流れているのかい？」

父上が興味深そうに尋ねてきた。

「うん。でも、メロディは何度も同じものが流れたり、その時一度きりしか流れないものとかあるから、全部覚えていいわけじゃなによ。」

その中からお気に入りのメロディだけに、歌詞を付けるのだ。

「ソラ、何か歌つてみてよー。」

兄のアルが楽しそうに囁く。

皆の顔をみても、同じようないつも歌ってくれるのを期待している様子だった。

「わかった。どんな曲がいい?」

別に隠している訳でもないので、あっさり引き受けた。

「ソラが気に入っている曲を歌つてみて?」

母上が目を輝かせながら答える。

期待には応えられないと思つけれど……。

「下手でも笑わないでよね。」

ヒ、あらかじめ家族に釘をさしておいた。

少し思考し、最初に浮かんだ曲を歌うこととした。

私が初めてこの世界で空を見上げた時に流れたメロディ。

私は歌つため、息を大きく吸い込んだ。

6話・始まりの歌

はつきり言って、それは

初めて家族の前で5歳児が歌うには

非凡すぎていたらしい。

歌といつても、この曲には歌詞はない。

メロディだけで楽しむのが

一番曲の良さが際立つと思つたからだ。

そのため、私はル～とかラ～とか

言葉にならない声で歌つた。

とても低い重低音から始まるこの曲は

絶望、困惑、不安や憎しみ。

これら全てを凝縮した

魂の叫び様であった。

徐々に闇が晴れていき、曲に陽光がさす。

時々 低く、高くと繰り返し葛藤し

最後には美しい旋律で締め括つた。

また、私は一つの間にか
目をつぶつていたらしい。

歌いきつた余韻を感じながら瞼をあける。

何故か泣いている家族の姿があった。

困惑し、たたずむ私に両親は近寄り

優しく私を抱きしめた。

この日を境に、私は様々な曲を歌い始める。

しかし、私は知っていた。

この世界では歌をうたうことを
職業としている人がいない事を。

歌を娯楽として、たしなむ風習が
根付いていない事を。

この才能は、お金にはならない事を。

7話・歌うの制限

私は人前で歌うのは
家族の前だけと限った。

兄や妹は、もつと大勢の前で
歌うべきだと思っている様だつたけれど。

両親はソラの好きな様にしなさい、と
言つてくれた。

私はなるべく目立たずひつそりと
地味に暮らしたいのだ。

ただでさえ、恵まれた環境。
私にこれ以上の幸せは贅沢だ。

家族の誰かが落ち込んでいる時には
寄りそい、元氣がでる歌を。

季節」とのイベントをする時には

イベントの雰囲気に合った歌を。

家族の誕生日には、幸福や安全を願い、心こめて歌にしてささげた。

私にとって歌は
体の一部の様になつていつた。

6歳になつた私は、
村の外れにある丘が、お気に入りの場所。

村全体が見渡せるこの場所は
空もとても良く見える。

赤い、赤い、夕日で染まる街並み。

ふと、メロディが自然と口から流れた。

外では歌わない様にしていたが、

人のいる気配がない場所なので気が緩んだ。

目で見てたり、風や夕日を肌で感じたり、この情景を歌にして紡ぐ。

バサツ バサツ

周りの木や丘にいた鳥が飛び立ち、驚いた事に私の近くに降りてきた。

歌つたら鳥が寄つてくるなんて
デイ 二ーのお姫様みたいだ。

嬉しくなつて、沢山歌つたため

帰りが遅くなり両親に怒られたのは
言つまでもない。

私は人のいない場所で
歌う事が好きになつた。

突然だが、父上の職業について
触れたいと思う。

父上は洋服のデザイナーだ。

その独創的なデザインが評判をよび
今ではそこそこ名が知れ渡つたお店になっている。

父上の素質もあると思うが、

私は民族衣装を取り入れたりして
斬新な服を作る父上は凄いと尊敬している。

母上は父上のお店の手伝いをしている。

洋服を作成したり、会計を行ったりするが
お店のファッション・モデルもする時がある。

もちろんお店ではモデルさんを何人か雇っている。

しかし、父上が母上に着せたい洋服を思い
考えて創作した服は、

最初に母上に着てほしいらしい。

何年経つても仲が良い夫婦である。

その日、今日も丘に行こうとしていた私を母上が玄関で引きとめた。

夕食を作るため、父上や他の店員よりも早く帰宅する母上は、よく父上からの伝言を預かつてくる。

「ソラ、悪いのだけれどお父さんのお店にこれを持って行ってくれないかしら？」

差し出されたのは、何枚かの布とお菓子。

きっと、この布を持ってきて欲しいと父上に頼まれたのだろう。

しかし、このお菓子は何だろうか。

不思議そつにお菓子を眺める私を見て、母上は言った。

「実は今、新しいモデルさんが来ているの。」

「どうやら、そのモーテルさんへの差入れらしい。」

分かつた、と引き受けたは私は
村にある父上のお店に向かつた。

9話・布は舞い、お菓子は転がる

家から父上のお店までは
15分程度の距離にある。

私は、昼間から夕方に移行する時の
空や風、風景を楽しみながら向かった。

村の商店街よりも
少し手前にあるレンガのお店。

母上の趣味で花がお店の周りに植えられており、
情景に色を添えている。

お店に着いた私は、
裏にある木で造られた職員専用の扉から
お店の中に入った。

「あらへ・ソラ君こんじちま。」

店のスタッフの女性から声をかけられる。

何度も私も父上にモデルの餌食にされているため
店のスタッフとも顔見知りなのだ。

「父上に頼まれた布などを持ってきたんですけど…」

手に持っているお菓子と布が入った籠を持ち上げる。

「ああ、ありがとうございます。きっと、さっき言つてた布だわ。

店長（お父さん）は奥の部屋にいるわよ。

ゆっくりしていってね。」

と、女性スタッフにワインク付きで言われ

私は苦笑いしながら、

「ありがとうございます」と返した。

奥の部屋はモデルの撮影ルームである。

ざわざわと、部屋から人の声やざわめきが聞こえる。

普段は撮影中、静寂した雰囲気で行われる。

そのため、今回の異様な雰囲気に、私はすぐに気付いた。

…なにか、撮影のトラブルでも起きたのだろう。

そのように考えながら、私は

部屋のドアノブに手を触れようとした。

その瞬間、

内側から扉が開き、

中から勢いよく飛び出してきた

2つの影と私は激突した。

舞つている布と、
ぱらつき転がるお菓子。

後ろに倒れながら、

私の視界は濃緑色が一面に広がっていた。

深い緑色。

まるで森みたいだ。

それが、私が抱いた第一印象である。

私と激突した正体は、
異国の双子だった。

肌が薄黒く、目と髪が濃緑色をしている。

すらりとした体系で、若干痩せ過ぎの気がするが、
私よりも少し年齢は上かもしれない。

顔は整つており、モデルなのだろう
撮影のために少し化粧がされていた。

しかし、髪や服がひどく乱れている。

あの時、私と勢いよくぶつかったこの双子は

あのまま3人で床に倒れてしまった。

そして、双子の逃亡劇は一瞬で幕を閉じたのである。

私のおかげで。

双子のつぶされていた下敷きになっていた私は、駆けつけた父上やスタッフによって救出された。

そのまま撮影室の隣部屋、椅子とテーブルしかない小さな部屋で、父上と双子と私の4人で今、向き合って座っているまでに至る。

はつきり言つて、まるで猫みたいだ。

逆毛を立てた双子の猫。

私の産まれて住んでいる、この国アボルテの国民は白い桃色の肌をもち、青い目をしているのが特徴だ。

髪の色は人それであるが、やはり目と同じ人が多い。

私は、今日初めて異国の双子を見た。

少し語弊があるかもしれない。

初めて、こんな綺麗な深緑の目を見た。

1-1話・双子の如龍

私は田の前に座りながら、一いちらを睨んでいる双子を見た。

何故、こんなに怖がつてこるのである。

「父上、この双子といひの國の眞葉で話しが出来ぬ?」

「実はまだ、この國に着たばかりでね。
まだ、会話は難しいかもしれない。」

私と父上が会話している間も、双子はいつも警戒している。

「語り口の口にケーションは難しこ。」

私は自分を指せり、双子を交互に見ながら言った。

「ソラ」

そして今度は双子を指さし、首を傾げてみた。

双子は一瞬だけ、ぽかんとした後に
私が何をしたいのか気づいたらしい。

疑うような、私という人物が危険でないか観察する目。

別に、何もしないのに。

ただ、私は…。

「綺麗だね」

私は、双子の頭と目を指さして言った。

本当に綺麗。

私は自分でも知らぬ間に、微笑んでいた。

「まるで、森みたい」

双子の目が大きく開かれる。

私は、もう一度自分を指をして言つた。

「ソラ。ソラ＝ブライアン。」

そして双子を再度指さし、尋ねる。

「君たちの名前は？」

双子はしばし、お互いを見つめあい

観念したように咳いた。

「……シルク」

1-2話・双子の相違点

異国の双子は一卵性の男の子ばかりで、顔や見た目はそっくりである。

しかし、よく見れば

兄のシアンは、少しだけ目が垂れており性格も優しいが、少し腹黒そう。

弟のコアンは、少しだけつり目で性格に少し難があるが、根は優しい。

これが、私が異国の双子と1週間接し知り得た情報である。

まだ、こちらの言葉を理解していない彼らは、

周りをとても警戒しており中々人を寄せ付けない。

年齢が近い私が、父上、

もしくは数名の限られたスタッフだけに

少しだけ緊張を緩めているようだ。

私は、丘に行く時間を削り、
最近は父上のお店に行っている。

今日も、父上のお店に向かつと
職員専用の扉の前に、双子が座っていた。

なんだか、最近こうして

私が来る時間に、待ってくれている様になった。

なんだか可憐らしい。

「シアン、コアン、こんにちは」

私が声をかけると、
シアンはこちらを向いて微笑むが、
コアンは、ふんつとそっぽを向いてしまつ。

いつもの二人の態度。

似ているのに、似ていない双子。

でも、どこか根元は似ている気がする。

私は1週間、彼らに接して感じてきた事を
今日は実行しようと思つていた。

「シャン、コアン」

立ち上がり始めた双子に向かつて

私は今日持つてきた、紙と墨を見せる。

「お勉強しよう！」

13話・勉強会

私は双子を見ていて気付いたことがある。

彼らは、あまり言葉を話さないといった事。

もちろん、こちらの言葉を喋れないという事もあるが

私には自分の国の言葉を話したくないという様にも見えた。

自分の国の言葉で話さないのならば、
私の国の言葉を教えてみよ。

そう考えたのである。

聞きなれない「勉強」という単語に
首を傾げる双子。

私は、一人を引っ張り

初めて話した、撮影室の隣部屋に連れて行った。

双子をテーブルにつかせた後に私は
一人に紙と墨をそれぞれ、1つずつ配る。

そして、私はこちらの言葉の

「ひらがな」の様な文字を書いた紙を持ち発音する。

「あ

「い

「う

「え

「お

何しているのだ、と言いたげにこちらを睨む双子。

私は、また「あ」という文字の紙を持ち、発音して
双子も一緒に言つよつに身振り手振りで伝える。

そして、この文を紙に書かせる。

双子も、「勉強」とこの単語の意味を理解したらしい。

弟のユアンの顔が曇るのを見た。

また新しい発見。

ユアンは勉強が嫌いらしい。

14話・双子と私の勉強会

「シアン、これは何?」

「机の上にある紙。」

「ユアン、これは何?」

「……、椅子の上の猫。」

正解という風に、私は大きく頷く。

勉強を始めて驚いた事は、
彼らの吸収力であった。

双子でも少しシアンの方が頭が良いが
どちらも、覚えるのは早い。

彼らは2週間程で単語やある程度の会話は出来るほどになっていた。

前の様に、紙や墨を持って来て
学校の様な勉強会はしないが、

私は彼らに会つたび
何か一つ単語を教える様にしている。

そして、彼らも私に
異国の言葉を教えてくれるようになつた。

自分が指さし、彼らが答えたものを
今度は私が、彼らの言葉で言つ。

『机の上の、紙』

『椅子の上の猫』

シアンとゴランが正解という風に頷く。

先程の私と同じ行動に、つい笑ってしまう。

すると、何故かシアンは顔を伏せ、ゴランはそっぽを向いてしまった。

まだまだ、彼らは私に心を開いてくれていないうだ。

1-5話・丘に行つてみよう

シアンとコアンは、まだ私に心を開いてくれていない。

少し悲しくなつて、

私は部屋の窓から外を眺める。

私たちの勉強室となつてゐる、撮影室の隣部屋から見る景色。

母上の植えた花が、綺麗に咲き誇り鳥のさえずりが聞こえる。

そういえば最近、丘に行つてないな…

久しぶりに明日行つてみよう。

そう思い立ち、ここには明日は来ない事を

双子に伝えておこう、と

振り返つて双子を見る。

何故か2人の顔が赤い。

それも、2人して不自然に
目が合っていた私と、視線をそらされた。

何なんだろう。

「シアン、ユアン、明日は僕 ココに来ないから。」

そう言つと、2人が慌て始めた。

何で慌てているんだろうか。

「そんなに嫌だつたの？」

「気づいてたの？」

とか、2人して良く分からぬ事を言つてゐる。

もう少し勉強を教えた方がいいかな…

そう思いながら、何を言おうとしているのか分からぬ双子に、とりあえず理由を伝えた。

「明日は行つてくれるね」

丘について、興味を持った双子は何かと色々尋ねてきた。

きっと一緒に行きたいのだろう。

しかし、丘は私のお気に入りの場所もある。

もう少ししたら、教えよう。

そう思い、私は言葉を濁し閉店になつた店内の掃除を手伝いに行くふりをして双子から逃げた。

お店に行つた丘は、

夕方に父上と一緒に帰宅する。

夕日を背中に浴びながら家へまでの道のりを一緒に歩く。

「ソラはシアン、コアンをどう連れつ？」

夕日あたり、私たち親子が作る影を眺めていた私に、父上が尋ねる。

「良い友達だと、僕は思ってるよ。」

「そうか、と父上は咳き私の頭をなでる。

そして、私を見て言った。

「ソラはお母さんに良く似ている、」

何度も昔、親戚や周りの人に言われ慣れた言葉だ。

「知ってるよ」

私は聞きなれた言葉を流した。

だから、気づかなかつた。

父上が「恋愛に疎い所も似ている」と咳いた事を。

家が見えてくると、ティアが窓から手を振っていた。

母上の作る夕飯の匂いが漂い、私のお腹を刺激する。

私は今日の夕飯と、明日久しぶりに行く丘の事を考えていた。

新たな出来事があるとは知らずに。

17話・秋の丘

次の日、私は久しぶりに丘に登った。

以前来た時よりも、少し草木が色づき
日本の秋の様な雰囲気を出している。

この国には、季節が5つ

春、夏、秋、冬、霧、がある。

霧の季節は1カ月程、霧で覆われる。

この季節には基本、あまり人は家から出ない。

霧に誘われ、惑わされるといつ言い伝えがあり、

毎年何人か、行方不明になるらしい。

少し見ない間に、変化している風景に心が躍る。

手始めに、秋の風や

丘が秋に模様替えする姿

そして久しぶりに来た丘へ、
ただいまを込めて歌にする。

息を吸い込むと、ほのかに枯れ葉の匂いや
草や土の匂いがする。

空は澄み切つており、雲は絵具で線を引いた様で、
私には一枚の絵にみえた。

目を開けると、頭と肩に鳥が。

隣にはキツネ、シカ、ウサギの様な動物が、
歌に耳を傾けるように私に寄りそつっていた。

そんな動物たちを私は愛おしく思ひ。

そういえば、動物たちに向かっての歌は作ってなかつたな：

私は今まで、思いついた曲を
ただ声に出して歌つていただけだといつ事に気が付いた。

私の歌を優しく聴いてくれる動物に
歌を捧げることにした。

丘を走り回り、
自然と共に生きている動物たち。

彼らは、とても優しく、
とても自由だ。

それは、この澄み渡る空に良く似ている。

普段のように、頭に流れた曲に即興で歌詞をつけて歌う。

動物たちに私の心が届きますように。

田をそつと開ける。

動物たちの反応を伺つと

動物たちは、何故か村へと続く
1本道を見ていた。

そこには新たな観察。

招かざる客。

シャンとゴアンが立っていた。

19話・残された双子と私

一瞬、あまりにもシャンとコアンがこの自然に溶け込んでいて。

私はまた新しい観客が丘の友達が、増えた気分になった。

私と動物たちに見つめられ双子は居心地悪そうにしている。

何か喋りかけようとしたのだろう。

双子が一步踏み出した瞬間。

私の周りにいた動物たちが一瞬にして走り去った。

その様子を見て、私は初めて
彼らが招かざる客といつ事に気付いた。

逃げていく動物たちに、呆然と立ちすくむ双子。

お気に入りの丘を

知られてしまつた事や

歌を聞かれた事は

この時、気にならなかつた。

私は、逃げていく動物の姿や

動物たちの歌の反応を見れなかつた事が

とても、残念で悲しかつた。

丘には、濃緑色の双子と

私が残された。

私は双子としばし、見つめあつていた。

風が吹いて、草木が揺れて音を奏でている。

木漏れ日が光り、宝石みたいだ。

何故か夢の中にいる様に
双子はぼんやりと立っている。

先に白旗を上げたのは私だった。

私は見つめあう事に飽きて

#芝生に寝転んだ。

ゆつたりと移動している雲を見ていると

悲しい気分が晴ってきた。

また明日、動物たちに
歌えば良いじゃないかと思い始めた。

私の横に影ができた。

氣づくと左右に双子が座っている。

いつの間に移動したのだろうか。

私は上半身を起こし、双子と向き合いつつ、

「『めん。』

双子が声を揃えて言った。

気が強そうな双子が謝つてくるのは
珍しいと思い、ついじつと見てしまつ。

氣落ちして沈んでいる表情。

なんだか頭に犬の耳が見えてきそうだ。

「いいよ、動物たちがいなくなつたのは悲しいけれど、昨日誤魔化して、ちゃんと丘の事を答えなかつた僕も悪いし。」

素直に謝つてくれた双子に、私も素直な気持ちを返す。

「僕の方こそ、ごめんね。」

双子が一斉に首を振る。

犬にしか見えなくて、可愛らしい。

「じゃあ仲直りね。」

私が笑つて言つと、

双子も嬉しそうに微笑んだ。

そういえば、双子のこんな笑顔を初めて見たかもしれない。

微笑んでいる双子は可愛らしい。

私も同じように笑えているかな。

「ソラは、歌がすげ上手いんだね。」

シアンが嬉しそうに言いつ。

「声も、歌ってる時は普段と変わるね。」

ゴアンが不思議そうに言いつ。

私は歌っている最中をよく覚えてない。

ただ、ただ、歌うという事をしているのだ。

なんだ、と私も初めて知る。

「あのや…、動物にソラは好かれる体質なの?」

「アンが興奮を抑えるように尋ねてきた。

「好かれてるか分からぬけど、
歌うと寄つてくるよ。」

私が答えた瞬間、

私の右手をシアン、左手をコアンが

力を込めて握つてきた。

「す、ソラー!」

また双子が揃えて囁つ。

生き生きと輝いている田も一緒にだ。

「僕らの国ではね、動物は

人間の心を見るつて言われてるんだよ

「だから、動物に好かれる人はとても
純粋で清らかな人つて言われているんだ」

双子が交代しながら喋る。

まだ、2人は興奮して
何か昔話の様な話を喋つているが

時々、彼らの母国語も混じり
意味を捉えられない。

私は、興奮している2人に言えなかつた。

自分が純粋で清らかな人なんかじゃない事を。

私の心中は、ドロドロで真っ黒だよ。

そう言いたかった。

22話・兄と私と、兄の友達

日も陰ってきたので、

そろそろ帰ろうと私が切り出した。

双子に、また今度改めて歌を
聴かせて欲しいと言われ、別に一度
聴かれてしまつたし良いかと思い、承諾した。

それを聞いた双子の
嬉しそうに笑った顔が
何故か脳裏に残つた。

丘を下りて、双子と別れる。

夕日が登り、外は赤い光で溢れている。

風も少し冷くなり、肌寒く感じる。

夕日が空も村も赤く染めている風景は
1日の終わりにはとても美しい。

夕日を眺めながら、家に向かっていると

左の道から、兄のアルが
友達と2人で帰つてくる姿が見えた。

すぐに気付いたアルが、私を呼んで立ち止まる。

「ソラ、一緒に帰ろうぜ」

その声にアルと一緒にいた友達も
私の方を見る。

少し足早に追いついた私を
アルが友人に紹介する。

「こいつ、弟のソラ」

顔を上げるとアルの友人と目が合つた。

初対面で見つめ合つ形になつてしまい、

正直気まずい。

少し走って息が上がっていたが、私はいつも様に微笑んでみた。

「初めまして、こんばんは」

困ったときに微笑む癖は日本にいた頃と変わらない。

しかし、

「可愛い！？」

そう言つてアルの友人に

抱きしめられた時には

さすがに微笑む事は出来なかつた。

23話・アルの友人、レオ

アルの友人は、兄と同じ9歳とは思えないほど体格がよく、私をすっぽりと腕の中に閉じ込めた。

その腕は日に焼けて黒く、筋肉が付いていた。

ちょうど肩が私の口元にあり、息が苦しい。

そして、むせかえる様な汗の匂いがした。

「レオ、ソラが苦しがってる。」

アルがベリッと、私を彼と引き離してくれた。

「ほつ、けほつ、

いきなり吸い込んだ新鮮な空氣にむせる。

「あ、悪い。俺の家、兄弟いないからつい。」

照れたように笑って、後部をガシガシと搔く。

そんな彼を面白そうに眺め、アルが私に紹介してくれる。

「驚いただろ？ 彼はレオ。俺の友達だ。」

「ひわっす。しかし、綺麗な顔してんな。」

今度はマジマシと顔を見られる。

そういうレオは、目が黒の様に深い青色で

まるで深い海の底のようだ。

顔は、どちらかというとカツコイイ系だらう。

太陽が似合いそうな人だ。

「レオさんは、カツコイイですね。」

見たままの感想を語りつ。

「うお、…ありがとな。」

輝くばかりの笑顔。

夕日に照らされているのか、顔が赤く染まっている。

「ソラ～～～」

振り向くと、何故か恐い顔したアルの姿があった。

23話・アルの友人、レオ（後書き）

2週間ほど、遠地に行くので
お休みします（；・・・・）ゞ

24話・夕日を歩く3人

左には怒った顔のアル。

右には嬉しそうな顔のレオ。

間に挟まれた私。

妙な空氣の中、
夕日に照らされた道を3人で歩く。

何故アルは怒っているのだろう。

嬉しそうに私に話しかけてくる、

レオの言葉を受け流しながら悩む。

ほのかに通る風が涼しく、私の体を通り抜けていく。

「しかし、アルもソラも顔がキレイで羨ましいよー。」

太陽の様な笑顔でレオが言つ。

左を見ると、アルの顔が赤く見えた。

「じゃあ俺につちだから。」

左右に広がる道で、レオが右に立ち言つ。

私たちの家はこの道を左に曲がったところにある。

「うわー、レオとお別れの様だ。

「おう、またな」

そう言つて、アルがあげた片手を
レオが握り、「また明日」と呟く。

ただ、私は道の向こうに沈んでいく夕日を見ていた。

レオが去った後、

握った手を見つめるアルに
気付かないふりをしながら。

どうやら、私は恋愛に鋭いらしい。

ぽかぽかと日差しを浴びて

温かい芝生の上に寝転びながら思う。

今日は朝から丘に来て

歌う訳でもなく、ただ空を眺めている。

この世界では、私のいた世界よりも
同性愛には優しい。

結婚も認められているし、

私の隣の家は、女同士の夫婦（？）である。

昨日、アルが怒ったのは

私とレオが仲良くしていたからだと
握った手を見つめているアルの姿を見て
気づいてしまった。

アルはレオが好きなんだ。

とくとく、と私の心臓が鳴る。

私は、誰かを好きになる時が来るのだろうか。

ソラとして、人を愛せるのだろうか。

何故か胸が苦しくなつて

手で心臓のあたりを握つてみる。

鳴りやまない鼓動を手に感じながら

私は、明るい未来を想像することが

出来なかつた。

暗い、暗い、何処までも続く闇。

自分自身さえも見えない
一面を覆う暗闇。

物音一つ聞えない。

ただ、感じるのは

恐怖。

何も見えない。

まるで、私が

闇に溶けていく錯覚に陥る。

私ではなくなる

私が消えていく。

嫌だ、と叫ぶが
声が出ない。

助けを求め探すが
誰もいない。

永遠と続く闇に
走っているのか
止まっているのか
分からなくなる。

私が消えてしまつ。

この闇にのまれてしまつ。

必死に誰かの名前を呼ぼうとするけれど

誰を呼べば良いのだろう。

一体誰が私なんかを助けてくれるのだろうか。

ひどい絶望感の中で

全身にのしかかる闇を感じた。

私は、

私は、

誰なのだろう。

背中に柔らかに死生を感じた。

ふうせり、丘の死生で
寝てしまつたらしく。

恐い夢をみた気がした。
その証拠を残すように
私の体はひどく汗をかいている。

寝ていた体を起こし、
辺りを伺つ。

夕田も落ち、薄暗い丘

はじめて見る普段と違つ風景。

風が吹き、揺れる木々が音を出す。

いつもと変わらなこと。

だが、薄暗い今の情景には
ひどく薄気味悪く感じる。

早く家に帰らなければ。

何故だか、嫌な予感がする。

私は何か莫大な恐怖を感じ、焦る。

立ちあがつた瞬間、

横の薄暗い茂みの中で何かが光った気がした。

振り向くと、赤い目が一つ。

白い狼の様な、大きい動物が

薄暗い芝生の中

私と対峙していた。

こんな綺麗な動物初めて見た。

その動物は、

薄暗い中に白く輝いている。

目は赤く、大きさは馬ぐらいある。

毛は白く輝き、ふさふさと風になびいている。

見た目は狼にそっくりだ。

目を離せない私に、

その動物が私に近づいてくる。

恐いという感覚はなかつた。

前から知っている様な感覚。

ずっと、待っていた気がした。

私の目の前で立ち止まる大きい動物。

私は自然と、手を伸ばしていた。

首の横辺りを撫でてみる。

想像よりも毛はごわごわして、かたい。

先程、強かつた風は静まり

木々の触れ合つ音は鳴りやんでいた。

静寂になつた丘は、
まるでこの世に
私と、この動物だけを残して
消えてしまつたみたいだ。

大きい狼の頭が下がつてくる。

私は無意識に狼の額と
私の額をくつつけようとした。

まるで、昔から

じつする事を知つていた様に。

しかし、私と大きい狼の額はくつつく事はなかつた。

何故なら、その瞬間

何処からか飛んできた矢が
この大きな狼を貫いたからだ。

29話・白い狼と私と

意味がわからない。

突然起きた出来事を

私は処理出来ずに、呆然とするしかない。

白い大きい狼は

ゅつくりと矢の飛んできた方を振りむく。

背中からお腹に刺さっている矢から
血が出ている。

その光景を見て

初めて私の周りに、大きい狼の血臭が

充満していることに気付いた。

私はその光景から目を離せず

ただ、腰が足が震えるのに

座ることも出来ずに、

大きい狼の前にいた。

薄暗かつた丘は、今では暗くなり
月の照らす光だけが頼りだ。

その時、大きい狼の後ろが

少し光った。

大きい狼が、後ろを振り向く。

瞬きもせずに

私は見ていたのに

次の瞬間には私の目の前に、

大きい狼の後ろに、

青年がいた。

月の光だけが辺りを照らす薄暗い丘。

いつの間にか目の前にいる青年。

私が青年を認知した時には、
青年は手に握っていた大きな月光に輝く剣を振り下ろしていた。

振り向こうとした大きな狼の、
背中から横腹を剣が通る。

白い狼から、赤い血が吹き出る。

大きい狼は、大きな口を開け、舌を垂らしながら
目は大きく開き、私と青年を見つめている。

悲痛そうな、憎悪をこめた様な目。
私は、この目を知っている気がする。

大きい狼は、空を見上げてより大きな口を開けた。

きつと、この大きい狼はかなりの大きな声で叫んでいるのだろう。

私の耳がびりびりと、痛む。

しかし、私の耳にはその叫び声が聞えなかつた。

ばたんっと芝生の上に倒れた、大きい狼。
その過程をずっと冷静に見ていた青年が動いた。

両手で大きな剣を持ち、
刃の先を下向きにし、
大きな狼の首元につける。

狼が氣だるげに、青年を倒れながら見上げる。

息の根を絶とうとしている青年の行動を
ただ見ていくことしか出来ない、私。

青年が剣を上げ、下ろす時には
大きい狼は私を見ていた。

目が離せない。

青年が下した剣が、
大きい狼の首元に沈む。

結局、私は大きい狼の命が消える瞬間を
ずっと見ていたのだ。

血が充満している夜の丘。

大きい白い美しい狼を

殺した青年が私の目の前にいる。

月の光が、青年を照らす。

それは今起きた俄かに信じられない出来事も照らした。

黒いと思っていた視界に

赤色が広がる。

青年は、黒髪だつた。

月明かりが無くなれば

そのまま闇に溶けてしまいそうだ。

静かに、命が尽きた大きい狼の前に立っている青年。

月光に照らされている青年は
どこか儂ぐ、

それでいて地面をしつかりと踏みしめている姿は美しい。

静寂がまた丘に戻つてくる。

今は恐怖も怒りも感じない。

あるのは虚無感。

青年が振り返り、私を見た。

「君は、死にたいのか？」

想像よりも声は幼く、

顔はややつり田の大きな目、

第一印象は黒猫。

月明かりに照らされて見た姿は
青年というより少年に見える。

彼の声に返事をせず、ただ見つめ返す。

彼は続けて言つ。

「お前には、死ぬ価値はない。」

死ぬ価値って何だろ？。

私は彼に言われた言葉を反芻はんすうしてみる。

私は、一度死んだのに。

私は彼から、目をそらさずに見続ける。

彼の目は髪と同じ黒色だ。

その黒は、淡いとか少し茶色が混ざる等なく
純粹の黒だった。

彼は背負つていた鞄に、
大きな剣を

白い美しい狼を殺した剣をおさめた。

私は背を向けると彼は、

死んだ狼の前にしゃがむ。

その瞬間、彼も死んだ狼も

私の目の前から消えた。

まるで、何もなかつた様に
風が木々を揺らし、音を奏でる。

しかし、私に飛び散っていた狼の血が、

今まで起きた事が夢じやないのを証明している様だった。

その時、私の足の力が緩み
かくん、つと膝が折れた。

どうやら今頃、腰が抜けたようだ。

どうじよつ、と考えていた時

遠くから私の名前を呼ぶ声が聞こえた。

あの後、私が帰つてこないのを心配した家族は色々な人に私を尋ね、探してくれたらしく。

そして、双子にこの丘の事を聞いたところ。

夜といふことで、危ないから母と兄と妹は一緒に行くと言つたが、家で私の帰りを待つてゐるらしい。

私を見つけたのは父。

腰が抜け、血を浴びた私を見て父は驚愕した。

喧嘩をしたと思つたらしく、

「誰にやられた!?」と、

しきりに尋ね、何故か私の腰やお尻を気にしていた。

腰が抜けたので、腰を気にするのは分かるが

何故、お尻も気にするのだ？

私は、父にウサギ（？）が死んでいて埋めてあげたと話した。

「この血は、違う動物に食べられて死んでいたウサギの血だと。

そして、そのまま寝てしまい気づいたら

丘が暗くなつており、怖くて腰が抜けたと。

かなり無理やりだが、私は白い狼と
あの黒猫の様な青年の事を、誰にも話したくなかった。

話したら、もう2度と彼に会えない気がしたからだ。

家では、アルは母と一緒に泣いて抱きしめてくれた。

妹は寝てしまつたが、後で

「霧に攫われてしまつた」泣いて大変だったと聞いた。

母には泣きながら心配され、父と同じような反応をされた。

何故、皆私の腰とお尻を気にするのか、分からぬ。

その日から、私は丘へ行くことを禁止されてしまった。

34話・月日は流れ

この世界でも学校はあり、7歳から入学することが出来る。しかし、日本の様に義務教育ではなく、家の事情や本人の意思で通わなくて良いとされている。

丘に行けなくなつた私は、あの狼や青年の事が気になりよく本を読むようになった。

彼や狼の事が書かれた本は、まだ見つからないがこの世界について、知る事の楽しみを知つた。

「僕は、学校では習わないもつと深い事を知りたい。」

両親に7歳の時、私が言った言葉だ。

もちろん、両親は学校に通うと思っていたので驚いたがソラの好きなようにして良いよ、と言つてくれた。

嬉しさと一緒に、何か胸の奥がツクツクと痛んだ。

村の図書館で本を読んだり、時々家族や双子に歌を披露したり父の洋服のモデルで少しずつ、お小遣いを貯めたりしている

内に、

毎日は経ち、私は12歳になっていた。

「ソラ兄さんって、すげーのねー！」

家族皆で夕飯を食べている時に、妹のティアが言った。

「どうして？」

何がすごいのか、分からず尋ねる。

「だって、ソラ兄さんは学校にも行つてないし、本ばかり読んで外にもあまり出ないでしちゃう？
それなのに、私の友達が皆ソラ兄さんの事知つてたわ！」

軽く引きこもり発言をされて、少し傷つく。

「そりゃあ、ソラは私たちの家族だし、ティアの兄さんだからでしょ？」

母上が父上にサラダのおかわりを盛りながら、答える。

「違つよ～！ソラ兄さんを見たことない子に、すつじい美人なんだしょ？って聞かれたもん！」

尊になつてゐるんだからー。」

思つが、ティアはとても可愛いし
この両親なので本人を見なくても憶測で
皆言つてゐるのではないだろつか。

「確かに、ソラは美人だよね。」

うんうん、つとアルと両親が頷く。

あまり自分の顔を意識した事がないので、私にはイマイチ分か
らない。

「ソラ兄さん、私ぐらいの歳の女の子が迷子になつてたの助け
たでしょ?」

いきなり質問されて整理がつかなく、そんな事あつたかなあと記
憶が不確かだ。

「綺麗な長いストレート髪の子よー私の友達なの。」

「たぶん、助けた様な気がするなあ。」

「その子が改めて兄さんにお礼言いたいんだつてー明日連れて来

ても良い?」

「別に、お礼言われる様な事してないのに…午後からなら構わないよ。」

午前中に図書館で3冊ぐらい本を借りて」よつ。

「午後なら俺、明日レオと少し買い物あるから会えないわ。」

「そうなんだあ。」

アルがいないのを残念がるティア。

アルの事も友達に紹介したかったのだろう。15歳になつたアルは、大人っぽくなり背も伸び始めている。

「お父さん、お母さん午後に家に呼んでも良い?」

両親は微笑んで了承した。

明日はどうやら、騒がしくなりそうだ。

今日は中々面白そつな本を見つけた。

図書館の帰り道、私は本を2冊抱え、
何処かそわそわしながら家に向かう。

季節は春になつており、まだ空気は少し冷たいが
空から降つてくる日差しは温かい。

虫や草花など、自然が目覚め始めるのを感じる。

「ただいま」

家に帰ると、母上は出かけているらしく
誰もいなかった。

今日は天氣が良い。

私は日が当たる窓辺の椅子に腰かけ
早速、本を読み始める。

私は本を読むと、周りに気が回らなくなるらしい。

気がつくと、部屋の入口にティアと
もう一人女の子が立っていた。

いつから、そこにはいたのだらう?

何か夢を見ているように、2人は立っている。

ティアの友人は顔が可愛いらしく、
2人並んでいると人形のよう見えた。

「こんなにちは

私は可愛らしいお姫に、微笑んで挨拶をする。

何故か2人とも、頬を染めた。

立ち話も良くなこと願い、

私は椅子から立ち、食事をする時に使用する
テーブルの方に移動し、暫く座ることにした。

その子の隣にはティア、そしてその子と正面で
向き合った場所に私が座った。

その子はストレートな髪の中程である長い髪、
そしてその髪と皿は同じ綺麗な水色だ。

身長はティアより高く、

学年でも背が高い方だと思われる。

ややついつで、少しキツイ印象を『』である。

しかし、この子の方が普通の子より
案外優しかつたりすると想つ。

その子を見ていて、そういえば
道で左足に怪我ケガをして蹲つまづっていた子が
いたのを思い出した。

それは私が図書館からの帰り道での事だ。

その子は転んで怪我をしたらしく
道も分からないと言い、目に涙を溜めていたが
懸命に泣くまいと耐えている様子だった。

私はその子を背負い、曖昧なその子の記憶を頼りに
道を歩いたところ、道の向こうから
その子の母親が探しに来ており、無事に解決したのだ。

「左足は、もう大丈夫なの？」

見たところ、特に包帯や絆創膏ばんそうこうは足についてない。

尋ねると、その子の顔が明るくなつた。

「覚えててくれたんですね！はい、傷も治り今まで通りです！」

「それは良かった。」

その子は笑うと、花が綻ひらくんだ様でキツイ印象がなくなる。

「家族もとても感謝しています、もちろん私もお礼が言いたくて…

それで何かお好きな物があれば、差し上げたいと思つていいんですけど。」

「お礼なんて、とんでもない。僕は普通の事をしたまでだよ。」

実際に、お礼なんでもうおうと考えていた訳でもなく困つてゐる時はお互い様、ところ両親の教育の賜物である。

「でも……」

「どうしても、お礼を形で示したい様だ。

「分かった。どうしてもとこづなう。僕の好きな物で良いんだよね？」

その子は、うるうる と頷き

一言も聞こえずまことに、やや上半身を前に出した。

「じゃあ、君に笑つていてほしいな。君の笑顔が、僕は好きだか

51°

私はこつこつと微笑みながら言った。

「冗談では無く、その子の笑顔はとても素敵なのだ。
私はその子が笑顔でいてくれたら嬉しいと思った。

しかし、思い返せば本心でもかなりクサイ言葉である。

その場が静まりかえった時に気付く。

1人で、心の中で反省している私は
前に座る2人の少女が顔が真っ赤になっていた事には気付かなか
つた。

37話・カーテンが揺れる部屋で

女の子2人で話したい事もあると思ひ、「

本の続きも気になつたので、私は自室に戻る事にした。

ゆっくりして言つてね、と声をかけ

自室に戻ると伝えると

その子が少し悲しそうな顔をした気がした。

私は、頬笑みかけその子に「笑つて?」と
声には出さないが口だけ動かして言つた。

その子に伝わつたらしく、

少し照れくさうに微笑む姿は可愛らしかつた。

ティアにも何かあつたら教えて、と伝え部屋を出る。

ドアを閉めた瞬間、女の子たちの
楽しそうな声が聞こえた。

自室に行くと、窓が開いていたらしく
風でカーテンがふわりと靡いていた。

光が差し込み、カーテンが輝き眩しい。

外では鳥の歌声が聞こえ、一緒に心地よい風が入ってくる。

私は、何かに誘われる様にベッドに座った。

そして歌つていた。

溢れるメロディを歌にして、何か伝えたかった。

自分でも何を伝えたいのか分からぬ。

ただ、歌い続ける事しか出来ない。

誰も聞く事のない、私のメロディ。

私がこの世界に生まれた時から
私の周りはメロディで溢れていた。

しかし、この世界ではあまり曲を聞く習慣がない。

私はそのことで、歌う事の意味を否定した。

でも自分の心までは、否定できなかつた。

私は歌いたい。

このメロディを紡いで曲を作りたい。

私は誰もいない丘や、家族に歌うことでの気持ちを昇華していた。

しかし、私は知ることの楽しさを知ってしまった。

始めは異国の双子に会い、違う国に心惹かれた。

白い狼や、黒猫の様な青年と会い、
私が知らない事について知りたいと思つた。

本を読むようになり、私は沢山の知識を得た。

その反面、図書館にはない本や

本にも書かれていない事も知りたいと思つた。

私は、この世界を自分の目で確かめに行きたい。

自分の目で肌で感じた事を、歌にして伝えたい。

そう自分の思いを確信した瞬間、私は胸が熱くなつた。

私は、吟遊詩人になりたい。

39話・夜、アルとの話

この国では16歳で成人とみなされる。

もちろん、進学という選択もあるが
大体の子が働き始めたり、何かしたい事をみつける。

来年16歳になる兄のアルは、
服を作る事の楽しさを知り
父上の仕事を引き継ぎたいと思つてゐるらしい。

夜にアルの部屋に訪れた時に教えてくれた。

きっと父上も喜ぶだろう。

私は、アルにだけ先に旅に出たい事を教えた。

曲を作り、歌いながら世界を見たいのだと。

最初、アルは驚いていたが

私が旅に出たいことは、私が皆に話すまで
内緒にしてくれると約束してくれた。

そして最後に「ソラ、おひこね」と言った。

「僕らしい？」

「もう。ソラは本当の空の様に、掴みどころなく氣ままに誰にも捉えれない感じがするよ。」

綺麗な三田町の夜。

夜には春だが、少し涼しい風が窓から入ってくる。

アルとベッドに横並びに座りながら、風を感じていた。

「ソラは、すうと……」

言いかけた言葉を止めて、アルが私を見る。

静寂になると遠くの山から、フクロウや狼の様な声が聞こえる。

月明かりを背にしている私の顔は
きっと逆光で黒く見え、アルに表情は見えないだろ。

「……いや、何でもない。そろそろ夜遅いから寝よう。」

結局、アルは言いかけた言葉をやめた。

「そうだね。アル兄さん、おやすみなさい。」

「ああ、おやすみ。いい夢を。」

私は、アルの部屋を出て自室に向かった。

アルが言いかけてやめた言葉の続きを

私は気づいていた。

きっとアルは、ずっと

1人で生きていくのか

と聞きたかったのではないだろうか。

40話・夜、ソラとの話（アル視点）

アルはソラが出て行つた後姿見つめていた。

何處か憐れな俺の弟。

幼い頃は大人っぽい弟を、少しライバル視していた。

しかし、大きくなるにつれて気づく。

ソラは俺を、いや物事を一歩後ろに下がつて見ていると。

ソラが一人で旅に出たいと言つたのは正直驚いた。

ソラはこの町で静かに過ごし

生涯を終える様な気がしていたから。

でも、歌いながら世界を見たいとソラが言った時

ソラにとても似合つと想つた。

掴みどころのない俺の弟。

空のよひに、色々な場所に行き漂つのが似合つ。

ただ、流れるままに、気の向くままに。

でもそれは、とても孤独だ。

12歳なんて、俺はまだレオや学校の友達と遊んだりしてい
た。

友達や家族がない、一人の空気は少し嫌だった。

その一方、ソラは孤独を好む。

いや、わざと一人になつてゐる気がする。

俺は、ソラに誰か一緒に連れていつたり

生涯を共にする人を作らないのかと尋ねたかった。

しかし、月光を逆光に浴び
暗く見えないはずのソラの目が、聞くなど言っている様に見
えた。

もつ、答えは決まっているからと。

ベッドに寝転び、

窓からこぢらを見ている三日月を見返す。

雲一つない、静かな明るい夜だ。

胸いっぱいに夜の空気を吸い込み、

目を閉じて

俺は願う。

いつか、ソラが心から気を許せる

そんな人と出会える事を。

俺の何処か儻げな弟。

大切な俺の家族。

双子のシャンとコアンが、休日と一緒に遊びに行こうと誘つてきた。

学校に行つていない私には毎日が休日だが。

シャンとコアンは、今では
この国の言葉を流暢に話せる。

もともと頭が良かつた、この双子だが
私が教えてくれたからだと言つてくれた。

嘘でも嬉しいと思つ。

この美系の双子は、やはり学校でも人気らしく
色々な部活や委員の助つ人をしているらしい。

友達も沢山できたと話すが、何かと私との時間を作ってくれる。

1人で過ごしている私を気にかけてくれているのだろう。

「僕に構わずに友達と遊んできなよ」

と言つと

「友達よりもソラの方が大事だ」

と言われた。

知らない間に、私は友達ではなくつていたらしい。

そもそも、あの夜の丘での事件以来、双子は私に何かと構

う。

父上の仕事場でモデルの仕事として良く会うのだが、
服を着替える時に異常にピリピリするのを止めて欲しい。

男の裸を見ても楽しくないのは分かるが、
そのイライラを周りの人ぶつけるのは良くないと思つ。

「ソラの裸を見てんじゃねえよ

」の間、弟のユアンがそう言って1人のスタッフに怒鳴つたが

私は、そのスタッフに申し訳なく思った。

今日はシアン、コアンにその事を少し注意しようかと思つて
いる。

休日と言つても、双子は学校の仕事があるらしく
私は通常のことのなかつた学校の門で待ち合わせる事になつて
いた。

ものすぐく、視線を感じる。

学校の門で双子を待ちながら本を読んでいたのだが、何故か通り過ぎる生徒からの視線が痛い。

この学校は制服はなく、私服なので生徒じゃない者が立っていても分からぬだろうと思つていたが、それでもないらしい。

入口に植えられている木の陰は涼しく校庭や何処かの教室からは、部活をしている生徒の声が聞こえる。

空は今日も青く、雲が優雅に流れている。

「あのう…」

空を観察していたら、前から女の子3人が声をかけてきた。

「はい？」

何だろ?と思いつつ返事をする。

「良かったら、名前を教えてもらえませんか?」

驚いて、女の子を見つめる。

まさか、取り調べを受けるとは思っていなかつた。

やはり、部外者が学校にいってはマズイのだろうか。

女の子は、沈黙を何か勘違いしたのか
顔を真っ赤にして、恥ずかしげに返事を待っている。

その姿がなんだか、可哀想なので正直に答えた。

「ソラ＝ブライアン」

「えつ、あのアル先輩とティアさんと同じ……」

女の子たちは驚いた様に、私の兄妹の名前を言いつ。

「どうやら、アルやティアを知っているらしい。

「ああ、僕の兄と妹を知っているんだ。」

兄妹の関係者なら、部外者でも多めに見てくれるかと思い
つい安心して笑顔になってしまつ。

しかし、何故か女の子たちは顔を赤くし固まつてしまつた。

この状況は異常に映るのか、門に
先程よりも人が多く集まつてきている。

このままでは先生も来てしまいそうに感じたので、
私は素早く女の子たちに別れを告げ、手に持つていた本を鞄
にしまい

自分で双子を見つけることにした。

校舎に入ると、埃っぽい学校の匂いがした。

懐かしい様な、くすぐったい様な気分になる。

生徒達の声や部活の声が、遠くから聞こえる。

廊下の窓から差し込む日差しが
温かい空気を作りだし、午後を主張している様だ。

廊下の窓から見上げた空は

窓枠が額縁の様に見え、一つの絵の様だ。

それは私が沙羅^{サラ}だった頃に見た空と似ていた。

双子を探すと言つても、校舎に初めて入った私は
何処に何があるのか分からず迷つてしまつた。

生徒に聞くのも、怪しまれるかもしれないしな…。

そう思い、生徒にも聞けずについつく私の腕を
誰かが後ろから掴んだ。

驚いて後ろを見ると、

そこにはティアの友達の

家に遊びに来た女の子が立っていた。

「ソラさん、どうしてここにいるんですか？」

その子は、驚いたといつ顔をして尋ねた。

もちろん、いきなり腕をとられた私も同じよつて驚いた表情をしているだよつ。

「シアンとゴランという双子を探しに来たんだけど、迷っちゃつて」

11の歳で迷子なのが恥ずかしく、少し照れてしまつ。

「あ、あの2人と知り合いだつたんですか……」

「どうやら双子の事を知っているらしい。

門で会った子達はアルとティアを知っていたし
この学校の人は物知りだ。

「うん、居場所分かるかな？」

「え、知つてますけど…今から行くんですか？」

少し驚いて言う少女に、何か不都合があるのかと不安になる。

私の表情が曇ったのをみて、慌てて少女が言葉を繋げる。

「いえ、行くのは悪い事ではないのですが先程、門が騒がしい
のを見て

急いで双子さんが外に走つて行つたので、
もう部屋にはいないんじゃないかな、と思うんです。」

なるほど、すれ違いが生じたらしい。

「双子さんとは、委員が一緒なんですか？」
今日はもう委員会終わったのですが、委員の教室に案内しますか？」

校舎の見学にもなるし、双子も私が校舎に入ったのに気付いて来る可能性もあると思い、案内してもらひことにした。

45話・届かない空

話ながら廊下を歩いていると、学校は一般人も出入り出来る事を知った。

私が門で名前を尋ねられたり、じろじろ見られたのは何だつたのか聞くと

「ソーリさんは、田立つかい…」

と、ぼそっと言われた。

父上の作った服だが、もっと地味な服装の方が良かつたのかもしれない。

今更だが、少女の名前はリリイだと知った。

少女の友達が挨拶した時に呼んでおり、自分が今まで知らなかつた事に気付いたのだ。

「教室は3階にあります。」

そう言われ、リリイの後ろに付き階段を上る。

一歩、一歩

一段、一段

地面よりも、体が空に近づいている事を感じる。

でもそんなの見せかけだけ。

本郷の匂はもつと遠く、私の手なんか届かない。

あの匂く美しい匂には、醜いものは似合わない。

い。

まあ、まあ、まあ

息が苦しくなつてきた。

あの時の私は、沙羅^{さら}は、本郷一歩踏み出したつもり
だつたけれど

なんつづけな一歩なのだろう。

滅びてしまった私は、小さく 愚かだ。

それでもなお、空に焦がれる私が一番 愚か者
だ。

外した。

そう思った瞬間、がくんっと私の足は階段を踏み

私は階段の一番上の段から

自分の足が地面から離れていくのを

体が浮くのを、何処か体で覚えていて

あるはずもない空が目の前に見えた気がした。

何処か、優しいメロディが自分の耳をかすめた気がして、その心地よさに目が覚めた。

目を開けると、目の前に靄もやがかかっている様に視界や周りの音が一瞬ぼやけた。

最初にはつまらと見えたのは、真つ白な天井にある少し薄茶色のシミであった。

その後に遅れて耳が治る。

自分の耳が最初に拾つた声は柔らかい初老の男の声だった。

「目が覚めた様だね。体調はどうかな？」

「さあ、自分は、ベッドに横たわって寝ていたらしい。

声がする方に顔を向けると、枕の横にある椅子に初老は座っていた。

白い服を着ているが、少しよれている。

初老は、垂れ目で優しそうな顔をしており、喋り方もおっとりしていた。

「 いじま、ビー？」

最初に気になつた事を初老に尋ねた。

「 君が階段から落ちて、運ばれてきた病院だよ。」

初老は優しく答えを返してくれた。

階段から落ちたのか。

道理で、頭の後ろが時々痛む訳だ。

でも、痛むのは頭だけではない。

痛みではない何かを感じる。

「 の感覚は何なのだらう？ 」

感じているこの違和感。

無意識に自分の胸のあたりを握りしめた。

「どうかしたかい、ソラ君？」

胸の握りしめながら俯いているソラに
初老が心配そうに声をかける。

また一つ、違和感に触れる。

「…ソラ？」

初老の顔が曇る。

伺う様に、観察する様にこちらを見る。

違和感が消えない。

「ソラって、僕の名前？」

そういえば、自分は誰なのだろう？

静かで、どこか儂げ。

音楽に対して天才的な才能があり、

学校には行かず、日々モデルをしていく。

お手伝いとして、時々モデルをしていく。

それが「ソラ＝ブライアン」……らしい。

僕は階段から落ちて、記憶を失くしてしまった。

「記憶」といっても、失くしたものに偏りがある。

「ソラ」が12歳までに積み上げてきたもの、知識や音楽、モデルの仕方、友人や家族……これらについては、覚えていた。

逆に、忘れてしまった記憶は

自分自身について。

自分の気持ちや考えていた事を思い出せない。

「ソラ」は消えてしまった。

じゃあ、「僕」は誰なのだろう?

まるで、「ソラ＝ブライアン」という入れ物を
全く別人の「僕」が借りているようだ。

いや、違う。言つならば、

自分の入れ物を誰かが使つていた後の様な
そういう違和感がある。

う。

僕が思う感情や、行動に、時々胸が痛いのは何故だろ

僕の前に、この体に入っていたのは

本当に「ソラ＝ブライアン」なんだろうか。

消えない違和感。

そして、起きた時から聞こえる優しいメロディ。

今までの「ソラ」の軌跡。

僕は知りたい。

僕は、答えを知りたい。

心では違和感のある「ソラ＝ブライアン」部屋のベッド

体は覚えていて、しつくつと馴染んで心地よ

い。
は

退院して、色々聞いたけれど思い出せないまま
数日が経過してしまった。

たが、
家族は、自分たちの事を覚えていた事に安堵してい

やはりソラの内面が僕であり
所々違うことに、違和感を感じている様だ。

…まだ、やらなければならぬ事は沢山ある。

目を閉じながら、僕は優しいメロディに耳を傾けてい
た。

儂げで静か…

人にきいた、『ソラ』を真似しようとするほど、僕と『ソラ』の違いを浮き彫りにしているようだった。

記憶をなくしてから一ヶ月。

両親や兄は、そんな僕でも受け入れようとしている様子だが、一番ソラに懐いていた妹の反応が冷たい。

まあ大好きだった人が、全然違う人みたいになっていたら誰でも困惑はするだろう。

時間が解決してくれるかな、と最初に思っていたが、そろそろ、人の真似をして過ごしていることがつらくなつてきた。

自分を偽るつて、思ったより負担が大きい。

自分の限界を感じ始めた頃、
僕はまだ外が明るくなつていない時間に目が覚めた。

最近、ストレスなのか眠りが浅い。

もう一度寝つみようと思つたが、僕の目は完全に覚めてしまつたようだ。

布団の中にいても暇なのでなんとなく窓の外を見ると、アルとレオがいた。

2人で楽しそうに軽く運動していおり、服装は動きやすい格好をしている。

どうやら、もっと早い時間から起きて、この辺りを走つてきたようだ。

確か、あの2人付き合つてるんだっけ…。

邪魔しては悪いかな、と思いつつも一緒に混ざりたい気持ちが湧いてくる。

それでも、気持ちを抑えようとしている僕の視界で

レオが剣のようなものを出した時には、着替えて部屋を

飛び出していた。

僕が何よりも不満だったこと。

それはソラの『体』だった。

ムキムキマツチョー！…まではいかなくとも男なら女の1人ぐらい守れる力が欲しい。

なのに、目を覚ました自分の体はヒヨロヒヨロで、女よりも弱そうな細い腕だった。

話を聞いてみると、ソラは大人しく武器や格闘などに興味はなく、家でのんびり過す事を好んだらしい。

僕も、皆の知っている『ソラ』らしく期待にこたえようとして大人しく装っていたけれど…

もう限界だ。

家から飛び出してきた僕に、もちろんアルとレオは驚いた顔をした。

「お、おまつり。そんなに慌ててどうした？」

いち早く我に戻つて、尋ねてきたアルは不思議そうに尋ねる。

レオも、剣の素振りを開始しながら、僕の方に視線を向ける。

「僕…、一緒に朝、参加したい。自分を鍛えたいんだ。」

自分の言いたい事を、アルの目を見ながら云える。

何を言われたか分から無い様な顔をしたアルの代わりに

素振りをしていたレオが大きな声で笑い出し

た。

その笑い声にアルも僕も驚いて、レオを見る。

「いやあ。。。アルからソラが記憶なくしたってのは聞いてたけど……」

素振りを止めて、僕の方へレオが近づいてくる。

近くで見るとレオの体は、全体的に筋肉がついて引き締まっていた。

レオの大きな手が上にあがり、もしかして殴られる!?
?と思つた瞬間

「見ねえついに男らしくなったじやねえか!」

「!」

ぐりぐりと、頭をなでられた。

馬鹿力なのか、はつきり言つて痛い。

アルの方を向き、レオが笑顔いっぱいにしてソラが朝の稽古に参加する事に賛同している。

うだ。
た。

こうして僕は、朝稽古に参加することが日課になつ

朝の稽古に、もちろん妹は大反対した。

「ソラ兄さんの、美しい体に傷がつっちゃつ……」

と大泣きし、僕と家族を困らせ
また、朝の稽古後に前を通り過ぎると

「ソラ兄さんが、汗臭いなんて……」

と言つて、悲痛な叫びをあげていた。

さすがの僕も、汗臭いと言われた時には落ち込んだ。

だから、今日さぢづやつて家に帰らつか悩んでいる。

ヒリヒリと痛む膝と頬を水で洗つたのは良いが
まだつすりと、血が滲んでいる。

朝のランニング中に、思いつきつい顔面から転んでしまったのだ。

妹がみたら、大泣き程度では許されない気がする。

「つものように、庭で悩みながら素振りをしている僕をアルが同情する眼差しでみていた。

「しかし、何でなにもない所でこけるかなあ？」

僕よりもずつしりと重い剣を振りながらレオが言つ。

その答えは、考え方をしていたからである。

僕のまわりに流れているメロディに歌詞をつよつと思つたのだ。

「ううつと、考え方してて：今度からは気をつけます。

」

チラッとレオは僕を見て、ニヤリと笑つた。

「してくれ

「綺麗な顔が勿体ないな。まあ妹さんの反応は明日聞か

それを言われて、僕は深いため息をついてしまった。

アルも苦笑している。

素振りを終えて、深呼吸をした。

「アルやレオのようには、まだいかないけれど。

少しづつ、自分の体に変化が表れているのを感じること
はできる。

朝田覚めた時に、鈍く感じる筋肉痛も

走っている時に感じる息苦しさや胸の動悸も

全てが自分が頑張っている、生きていこうの証の
ような
気がして。

胸一杯に吸い込んだ息をはきながら、
やっと田覚めてきた空を仰ぐ。

僕はもう一度、息を吸い込み

歌を紡いだ。

この世界の生きる楽しさを
誰かに、伝えなきゃと思った。

誰もよりも世界に絶望していた誰かに。

空は赤く染まり、美しく田覚めよつとしている。

きつとソラも、いつか田覚めるのだろう。

その時 僕はどうしているのかな。

いつ起こうつるか分からぬことを想像するよつも

今 過ぎしてくる時間を大切にしよう。

思いつきつ生きてみよ。

僕が僕らしく、過ぎていた日々は

形は残らなくとも きつと誰かの中に残るだろう。

それは、小さくとも ほのかでも

僕が生きた証が残るのなら

僕は僕らしく、精一杯生きよつ。

なんとなぐ、歌いたい気分になつて

誰かにこの気持ちを伝えたいと思って

淡い口差しが差し込む空を眺めながら

気づいたら僕は歌つていた。

それは、どこか切なさを含んでいたけれど

同時に希望も含んだ歌。

この世界に、誰よりも絶望していた誰かのために

僕はこの歌を捧げたいと思つたんだ。

きゅう、と胸がしめつけられるような気持ちになつて

ふと、横を見ると

アルとレオが身動きせずに、たたずんでいた。

「どうしたの？」

動かない2人に、不安を覚えて尋ねるとまばたきをした後に、一気にリアクションが返つてきた。

「おまえ、すげえ才能もつてんな」

「いっは驚いた、と言つてレオは何故か頭をなでた。

だから、力強すぎて痛いつて。

またアルに怒られるよ~と言おうとしてアルの方を見ると

アルは、何かと決別したような顔をしていた。

それは今までのソラと僕は違うと薄々は気づいて受け入れていたけれど

本当の意味で受け入れた瞬間のような気がし

た。

きっと、ソラの歌と僕の歌は

決定的に何かが違っていたのだろうと

アルの様子をみて容易に想像できた。

何かに別れを告げる様に目を閉じたアルは

目を開けた時には、いつも通りに戻っていた。

「そんなにソラをなでまわさないでよ。」

といって、レオを止めに入る。

ケチケチすんなよ」というレオの言葉を無視して

アルが僕の方を見た。

「ソラ、良かつたら家族の前でまた歌を歌ってくれないかな？」

まるで、それが何かの呪文を解く鍵になるよつた
そんな響きがある言葉だった。

「分かつた。機会があつたら歌うつよ。」

俺の事は無視か～と云うレオの言葉を無視して
僕は答えた。

忘れていたが、ここは僕の家の庭である。

そして、早朝に大きな声で歌つた僕の声は
思つたよりも響いていたらしい。

その証拠に、妹が家から飛び出してきた。

「ソラ兄さん、また歌を歌つようになつ…」

久しぶりに自分から話しかけてくれた妹に
やつと仲直りの兆しが見えたと思った瞬間

僕の顔を見て、妹は一時停止した。

どうしたのか分からずに、首をかしげると

それに合わせるかのように、妹も首をかしげる。

田を何度もこすつた妹は、もう一度僕を見て

と、僕の歌声よりも大きな声で叫んで気絶した。

急いでアルが駆けつけて、
ま地面上にぶつかる前に妹を支える。

それを見ていたレオが一言

「想像以上に、激しい反応だな。」

と呟いていたのが聞こえた。

そういえば、僕は怪我をしていたんだっけ。

歌を歌つていて気付かなかつたが
僕の頬は傷口が開いて血が垂れていたようだ。

妹の叫び声を聞いて、両親が飛び出でたことや
何事かと近所の人たちが出てきたのは言つまでも
ない。

この時、僕は妹の事を気にしていて忘れていた。

僕に、いやソラに、傷をつけて怒り狂うのは妹だ
けでなく

もう2人いることを。

52話・蛇に見込まれた僕

蛇に見込まれた蛙。

とこう言葉が頭によぎる。

ソラは色々な本から知識を得ていて、物知りだなあとまるで他人事のように思つてしまつ。

この状況を意識したくないあまり僕の思考は何とか他の事へと頭を回転させている。

しかし、いくら現実逃避をしても現状は変わらない。

そう、目の前にいる鬼の形相の双子がいる現状は変わらないのである。

「ソラ? ちゃんと人と話す時には目を合わせようね?」

声だけ聞くと、優しげなシアンの声も

今はその奥に秘められている怒りを、ヒシヒシと感じてしまつ。

もちろん、シアンの顔は普段通り微笑んでいる。しかし、この怒りのオーラは隠せていない。

まだ、体全体で怒っていると分かるコアンの方が安全な気がする。

「不注意以外の何物でもないだろ？筋トレなんかするからだ。」

どちらにしても、怒りを含む双子の言葉に僕は答えられない。

そもそも、こんな事になつたのは父のせいだつたりする。

モデルの仕事として来ていた双子に

僕が朝にトレーニングを始めた事や、怪我をした事を話したのだ。

妹もそうだが、この双子も

僕が、ソラが変わった事に対し、受け入れられてい

ない。

これでも大分、最初よりかは話してくれるようになつたが……

初めて会った時の動搖はすごかつた。

双子は『ソラ』が『僕』であると感じた瞬間、絶望や悲しみが、どう表現すれば良いのか行き場をなくしており

見ている僕が、とても切ない気持になつた。

この双子はきっと、『ソラ』にただならぬ思いを抱いていたのだけれど。

でも、もう僕はソラの真似をするのはやめた。

その方が彼うことっても良いと僕は思つ。

彼らは僕に、ソラの面影を探し、期待し、絶望する。

そのまま期待を持たせるのは、僕には荷が重い。

まだ意識を双子に集中していなかつた僕はコアンが手を伸ばし、僕の頬に触れるまで気付かなかつた。

ひんやりと、少し冷たい手が僕の頬の傷に触れる。

深い深い緑の目と、僕の目が合つ。

キレイだなあ。

「 森みたいだね 」

その言葉を言った時の泣きたい様な

笑いたい様な

そんな2人の顔を見て

僕はこんなに人に愛されている『ソラ』に

何故だか 嫉妬に似た気持ちを感じた。

僕にうまれた『嫉妬』という感情。

思えば、目覚めた時からこの感情は僕の隣にいたのかも知れない。

夜に僕の部屋から空を見ると、上には沢山の輝きがある。自分が何者なのか分からず不安だった日々を、この星空に何度慰められたか。

部屋の窓を開けると、冷たい空気が部屋に入ってくる。

温度の差に自分の息が白くなる。

暗闇の空に浮かぶ月を見上げながら思つ。

きっと、きっとそつ遠くない未来。

僕はまわりの人々と笑つて過ごせているだろう。

それは、表面上だけの笑顔であつても
心の奥の『ソラ』を忘れていなぐても

それぞれ、僕と『ソラ』との境目を見つけ出し順応していく。

僕も『ソラ』の影を忘れ、いつかは心の奥の『ソラ』の存在さえ薄

れていこうだらう。

だけど 僕は気づいてしまった。

誰よりも苦しんでいた『キリ』に唯一してあざられる事を。

歌を思いつきり歌つたあの朝に僕は思い付いてしまった。

ねえ僕は、少しだけでも『キリ』に近づこうとしているのかな。

月日は流れて、僕は16歳になっていた。

何度も分からぬ霧の夜が、もつすべ温かい日差しに包まれる頃。

あれから4年も経ち、まわりの家族や友人とも馴染んだが

そろそろ限界だと僕は感じていた。

きっと、これ以上馴染んでしまうと

歯の中から『ソラ』が消えてしまうだらう。

初めて歌を歌つたあの日に感じた『キリ』はそれを悲し

むのかな。

『キミ』のことだから、それも運命だと受け入れるかもしれない。

哀想だから。

でも、それでは あまりにも『キミ』が可

だから、僕は決めたんだ。

ソラ＝ブライアン 16歳。

第一歩を踏み出そうとしていた。

これが人生を変える旅になるとは、この時の僕はまだ知らない。

54話・成長と、決意と、鼓動と

水色の色素の薄い、サラサラした髪が風に揺れる。

肌は 他の人よりも白く吹き出物一つなく、美しく、細い体の下には、日々の努力により引き締まつた筋肉がついている。

しかし、珍しいのは目と髪の色は異なること。

彼の目は体の全ての色素を凝縮したよつた、深い瑠璃色。

その目で見つめられると 何もかも見透かされそうな気持ちになるといつ。

それが、人々にきいた16歳になつた『ソラ＝ブライアン』の容姿である。

かつと以前の『ソラ』だったら、間違ひなく
その容姿と雰囲氣で美少年と言われ 近づきにくさを感じ

ていただろう。

だが、今では容姿よりも ふんわりしている性格が勝り
老若男女構わず、人々から慕われている。

しかし、ソラがもともと変わらずに共通していたこと
がある。

それは自分の恋愛に対しては とても鈍いこと。

この容姿と性格で 今まで恋人の1人もいないのは奇跡にも
近いことだ。

そんなソラは旅に出ることを決意していた。

それは、兄のアルから以前の『ソラ』が吟遊詩人になり
たいと

話していたと聞いたことも理由としてあげられるが、

一番の理由はソラという体を通して『キミ』という もう1人の
存在を感じた事だ。

『キミ』を探すために、自分という者の答えを知る
ために

『僕』は町を出て 旅をする事にしたのである。

吟遊詩人をしながら、目的地を決めずに町を渡り歩く。

両親からの了承を得て 明日出発という事が決まつてから

僕の心臓は 興奮して うるさい。

『キリ』も同じように興奮しているのかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4936m/>

答えはありますか？

2011年8月23日00時23分発行